

「腸疾患の新しい診かたと治療」

東京都立駒込病院院長 松 永 藤 雄 編集

山口大学教授

竹 本 忠 良

依頼されて、執筆を受諾した原稿は、それこそあつという間に机の上に溜まってくる。書くことを承諾した以上、契約を完了したわけである。

そこで、1日も早く、少なくとも予定日までには書きあげなければならないと思って、このごろみんなが使っている葉屋さん提供の color clear holder のいくつかに、たくさん原稿用紙を入れて、日本列島を飛び廻ることになる。ところが、締め切り日のきつい雑誌の原稿の執筆のほうで、どうしても先になる。そのうえ、当り前のことであるが、こと書評となると、まず提供された本をすみずみまで読み通さなければならない。眼光紙背に徹しなければ、書評者はつとまらない。それには、まとまった時間を多忙なスケジュールのなかから割り当てなければならない。

というようなわけで、松永藤雄名誉教授編集の「腸疾患の新しい診かたと治療」の書評がずいぶん遅れてしまった。たいへん申し訳ないと思っている。

もっとも、書評は早く本を読みとばせば書けるというようなものでは

ない。永井龍男の「雑文集緑さきの風」（講談社）には、“よい本に出逢った喜びは、何事にも比べることが出来ない。徹夜しても読み明かすのは若いうちの情熱である。年を取ると、一気に読み通すのが惜しまれて、明日のために枕もとの灯を消すかも知れない”とある。

この本も、そういう思いで読んだ。初心にかえったつもりで、蛍光の暗記ペンですっかり本をよごしてしまった。本当に勉強になったと、書評のおかげで精励できたことを感謝している。私のように、これから腸疾患について学ぼうと決心した人に向いている本である。難しい内容を平易に誰でも理解しやすいように説明してある。おもな腸疾患について、重要なテーマはほとんど網羅してある。それでいて、教科書的な平板な記述でないことが、素直に、今日の腸疾患などの知識の吸収を助けてくれる。

特に、便通異常概論（名尾）、腸疾患の生化学（下山）、腸疾患の病態生理、特に吸収不良症候群について（細田・馬場）、腸管の酵素異常（笹川）といった“腸疾患診療の基礎”篇は、消化器病学という学問のさま

ざまな流れのなかで、X線診断学や内視鏡診断学のような純臨床的なものに、とかく眼をうばわれやすい現状において、これらが常に変わらない不動の重要な位置を占めていること、しかもこれらが着実に進歩していて、とうてい古い知識でもって、腸疾患を理解できないことを教えてくれる。

もともと、この本がどのような背景から誕生したのかということは、松永院長の序にうかがえる。すなわち、ある社の医学セミナーの講演が base になっているようで、本書の長所と若干の短所は、すべてセミナーを基にできあがったという基本的性格によるものと思っている。序からうかがえることは、この本が生まれるまで、相当長期間にわたる生みの苦しみがあったようである。

編集者の粘り強い努力と、消化器病学全体の業績を十分に全体として把握されている若々しい頭脳に、心から敬服した次第である。法然の言葉に、“此法の弘道は、人はとどめんとすとも、法さらにとどまるべからず”という、彼の生涯をかけた信念を述べたものがあるが、いま私は、この好書を世に送られた松永藤雄先生の玉案の下に、この法然の寸言を捧げたいとしみじみ思った次第である。

B 5 判 536 頁 図 155 写真 334
原色図 58 1983 年
¥ 20,000 円 400

医学書院 刊